Works of Japanese Juvenile Art at the Time of the Pacific War(26) : Articles from the Shokokumin Shimbun(14)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊木, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6545

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻女子大学紀要―文系―　第五十号、平成三十（二〇一八）年三月

「戦時下における児童文化」について（その二六）

――「少國民新聞」（東日版）における読者投稿作品の位相と展開（一四）――

熊木哲

【キーワード】戦時下、児童文化、少國民新聞、俳句、昭和十七年

本稿では、「少國民新聞」に掲載された、昭和十七年の「俳句」を四半期毎に検討する。

引用に際しては、原則として、旧字体を新字体に改めた。

作者については、在籍校名・在学年・性別を記すにとどめ、適宜、府県名を補った。在学年次のうち「高一」「高二」は高等科一年、二年を示す。

一　昭和十七年の「俳句」作品の展開

昭和十七年の検討対象は、一月一日（木・第一六四二号）から十二月三十日（水・第一九五一号）までであるが、国会図書館蔵「少國民新聞」には、一版と二版の十日分が含まれており、三二紙面となる。しかし、二月二十日（金・第一六八五号）、五月七日（木・第一七四九号）、五月三十一日（日・第一七七〇号）、十二月十九日（土・第一九四二号）のマイクロフィルムが「欠」であり、検討対象は三一八紙面である。

作品の掲載状況は、月曜日を、原則、休刊とし、火曜日から日曜日まで、「綴方」「詩」「短歌」「俳句」「書方」「図画」の総てか、或いは、その一部が掲載されていた。

「少國民新聞」に改題された昭和十六年には、前身の「東日小学生新聞」では設定されていた「紙上作品展覧会」あるいは「紙上作品展」の紙面構成は見られなかったが、十七年五月十三日（水・第一七五四号）から「私達の作品室」が設定された。

「私達の作品室」は、原則として、水・金・日の週三回設定されたが、八月二十九日から九月二日までの四日間連続で設定されたこともあり、設定上の基準は見られないことになる。

紙面構成は、前年（十六年）の十月九日から週一回（木）、十一月五日から週二回（水・金）、十二月九日からは週三回（火・木・土）が二面構成となったが、十七年も同様に、原則として、二面構成が週三回（火・木・土）、四面構成が週二回（水・金）であったが、金曜日の二面構成が三月二十日、六月十二日、七月十七日・三十一日、八月二十一日、十月十六日の六日分あった。

日曜日は、四面と八面が交互に設定されていたが、十一月八日（日）は六面となり、以後、日曜日は四面と六面構成となり、十七年の八面構成は十月二十五日が最後となった。

二面構成では、十六年には十五日分で全ての作品掲載は無かったが、十七年では七十日分で無かった。

なお、国会図書館蔵「少國民新聞」マイクロフィルムには、十七年五月十六日・二十一日・二十三日・二十四日・二十六日・二十八日・二十九日・三十日、六月四日分で一版と二版に作品が収録されており、一版と二版で作品が異なる場合に掲載作品数として集計した。

「俳句」の掲載では、五月二十一日の一版では三作品が掲載されていたが、二版では同じ作品の二作品となり、五月三十日では一版が一作品、二版では一版とは違う三作品が掲載された。ただし、このうちの一作品は五月二十八日に掲載された作品と同じ作者・内容であった。

昭和十七年、「俳句」の掲載数は四七〇作品。

内訳は、第一四半期が　九八作品。
第二四半期が一六二作品。
第三四半期が一三七作品。
第四四半期が　七三作品。

昭和十七年に掲載された「俳句」四七〇作品のうち、作品内容に「戦時下」色の見えるのは五七作品（約一二・一％）。

内訳は、第一四半期では　九八作品中一一（約一一・二％）。
第二四半期では一六二作品中二一（約一二・九％）。
第三四半期では一三七作品中　九（約　六・六％）。
第四四半期では　七三作品中一六（約二一・九％）。

因みに、昭和十四年から十七年における「俳句」作品の内容に「戦時下」色を内容とする作品は、次のようになる。

昭和十四年は、三三二作品中三六（約一〇・八％）。
昭和十五年は、五五六作品中六四（約一一・五％）。
昭和十六年は、四一八作品中四七（約一一・二％）。
昭和十七年は、四七〇作品中五七（約一二・一％）。

十七年の「俳句」は、掲載数が最も多かった十五年より八六作品少ないが、「戦時下」を内容とする作品の掲載率は〇・六％増加し、昭和十四年以降で最も高くなった。

なお、十七年一年間に、複数の「俳句」作品が掲載された児童は、最多の七句が一名（青森県女鹿沢校高二男子）。
六句が一名（神奈川県藤沢市藤高校高二男子）。
五句が三名（青森県田子校高二男子、福島県小田倉校高二男子と東京市日本橋区箱崎校六年男子）。

以下、四句が七名、三句が八名であった。

また、同じ在籍校で、一年間に最多の一八句が掲載されたのは、青森県田子校（六年男子一名、高一男子一名、高一・二男子一名、高二男子八名）。

一六句掲載されたのが二校。神奈川県藤沢市藤高校（高二男子六名）と千葉県竹岡校（五年男子一名、五・六年男子三名、六年男子四名）。
九句が青森県師範附属校（五年男子四名、六年男子四名）の一校。
七句が青森県女鹿沢校（高一・二男子一名）の一校。
六句が秋田県里見校（六年男子一名、高一男子三名、高二男子一名）の一校。

その他、五句が七校、四句が八校、三句が九校。

以下、四半期毎に検討するが、都合上、内容に「戦時下」色の見える作品に第一四半期から第四四半期まで整理番号を付す。

二　昭和十七年第一四半期における「俳句」

第一四半期（一月～三月）に掲載された「俳句」は九八句。

この内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、次の一一句であり、掲載率は約一一・二％となる。

1　神おはす空敵機来ず初日の出
（宮城県柳津校高二男子、一月二十四日・土、第一六六二号）
2　初夢に陣中の父颯爽と
（山梨県上野校高二男子、一月三十日・金、第一六六七号）
3　朝まゐり雪ふむ音の静かなる
（岩手県平館校高二男子、同右）
4　梅薫る故郷を後に開拓士
（青森県田子校高一男子、二月十日・火、第一六七六号）
5　寒空を突きてすすむか練習機
（埼玉県児玉校六年男子、同右）
6　かしは手の響く社や朝の雪
（神奈川県藤沢市第二校六年男子、三月三日・火、第一六九四号）
7　大陸の勇士を偲ぶ吹雪かな
（新潟県川治校高二男子、三月七日・土、第一六九八号）
8　梅たのし傷兵と肩ならべゆく
（茨城県戸多校高二男子、三月十三日・金、第一七〇三号）
9　停車場に勇士送るや春の風
（山形県清川校五年男子、三月二十二日・日、第一七一一号）
10　若芽もゑてもはや東亜の春がくる
（東京市大森区池上校高二男子、三月二十四日・火、第一七一二号）
11　春光に爆音高き爆撃機
（茨城県木崎校高二男子、三月二十九日・日、第一七一七号）

1　神おはす空敵機来ず初日の出
2　初夢に陣中の父颯爽と

「初日の出」「初夢に」は、共に新年の季語。

第一句「神おはす」は、「神国日本」の意味。「神」が守っている国なので元旦には敵機もやって来ないということ。

第二句は、めでたい夢を「初夢」に見ると、その年は縁起がいいといわれているが、見た夢は出征中の父が「颯爽」としていたというもので、父にとって縁起のいいことが起きますようにとのこと。

3　朝まゐり雪ふむ音の静かなる
6　かしは手の響く社や朝の雪

第三句は、降り積んだ雪を踏んでの、第六句も「朝の雪」が降る中、出征兵士の武運長久を祈るため、最寄りの神社へ参拝してのこと。児童には、季節を通じて、早朝の参拝が児童に課せられていた。

4　梅薫る故郷を後に開拓士
9　停車場に勇士送るや春の風

第四句の「開拓士」は、満洲開拓に向かう「満蒙開拓青少年義勇軍」の見送りに、第九句は、停車場での出征兵士の見送りに、それぞれ児童が動員されていたことからの作句。

5　寒空を突きてすすむか練習機
11　春光に爆音高き爆撃機

第五句と第十一句は、共に、見上げた空を飛んで行くが、「寒空」から「春光」へと季節は進んでいく。

7　大陸の勇士を偲ぶ吹雪かな
8　梅たのし傷兵と肩ならべゆく
10　若芽もゑてもはや東亜の春がくる

第七句は、吹雪を見て、中国大陸に出征中の「勇士」の苦労を偲ぶもので、身寄りの「勇士」でもあってのことか。

第八句は、冬が過ぎ、観梅に「傷兵」と出かけた時の作句。傷病兵への慰問の一齣。

第十句は、目の前の「若芽」をみて「東亜」に春が来ていることを実感したというもの。高等科二年生が思い描いている「東亜」とはどのようなことであったか。

第一四半期における「俳句」の「戦時下」は、児童にとって、作者の父が出征中の当事者であり、満洲への「開拓士」、出征の「勇士」

にと、その見送りの列に整列し、戦勝祈願、武運長久の神社参拝も、傷病兵への慰問も、その役割であった。

第一四半期における最大の戦果はシンガポールの陥落であったが、「俳句」作品に読み込まれることはなかった。

一方、第一四半期の「俳句」は、九八句であり、「戦時下」色を内容とする作品が一一句あるものの、残りの八七句は、児童の身の回りの日常を内容とする作品であった。

燃えしぶる焚火を囲む雪の午後
（神奈川県御所見校高二男子、一月十八日・日、第一六五七号）

落葉たく煙の濃さや霜の中
（青森県田子校高一男子、一月二十四日・土、第一六六二号）

みちばたの焚火かこんで立ちにけり
（埼玉県樋遣川校六年女子、三月十二日・木、第一七〇二号）

共に焚火の情景。「燃えしぶる」と「煙の濃さ」は、いずれも燃えている様子がはかばかしくないこと。前者には、「燃えしぶる焚火」にもかかわらず、そこから離れられないでいる様子が想像され、後者からは、霜の朝、燃え上がりにくい焚火の様子が伝わってくる。

「みちばたの」は、上手く燃え上がり、手をかざして暖を取っている輪に児童もいるということ。温かさと笑顔とが伝わってくる。

寒空に小雀達の鬼ごつこ
（北海道中札内校四年男子、一月十四日・水、第一六五三号）

雪降つて小雀宿をさがしけり
（青森県八戸市売市校高二男子、二月十三日・金、第一六七九号）

小雀や軒からおとす朝の雪
（北海道力昼校高二男子、二月二十二日・日、第一六八七号）

三句とも、第一四半期の季節を、小雀の動きで捉えた作品。

「寒空に」では、寒い中、空をあちこちしている小雀達を見上げている児童がいるということ。

「雪降つて」では、児童は、「雀のお宿」を知っていたということか。その宿が雪に埋もれ、小雀が「お宿」の辺りを飛び回っているということ。

「小雀や」では、小雀が軒で雪浴びでもしていたか。朝、軒からパラパラと雪が舞って来くるのを見上げていた。

木の根より消えはじめたり春の雪
（新潟県紫雲寺校高二男子、三月四日・水、第一六九五号）

遠山にまだ雪みえて麦のびぬ
（青森県師範附属校五年男子、三月八日・日、第一六九九号）

雪どけの庭に水仙芽を出しぬ
（神奈川県綾瀬校高二女子、三月十一日・水、第一七〇一号）

春の日にひなたぼつこの子猫かな
（埼玉県児玉校六年男子、三月十五日・日、第一七〇五号）

雪消えてせりつむ人の姿見ゆ
（長野県穂高校六年男子、三月二十二日・日、第一七一一号）

峰々の雪はとけたり卒業歌
（青森県女鹿沢校高二男子、同右）

「木の根より」は、雪どけが木の根元から始まる事を見て取り、「雪どけの」では、庭の雪も解け、水仙の伸び始めを見て、そこに春の到来を実感したということ。共に、確かな観察眼による作句。

「遠山に」は、里の雪は融けたものの、遠くに見える山々には雪が残っており、目の前の麦の伸びにも勢いがないということ。視線は、遠くに近くに向けられ、春の浅さを感じているということ。

「春の日に」には、日だまりに包まれている子猫の温かさを作者が体感しているということ。子猫に注ぐ視線があたたかい。

「雪消えて」は、川端の芹を摘んでいる人をみたということ。野原の雪も消え、水も温んで春が来た光景だ。

「峰々の」は、山の雪も消えて卒業の歌を歌う季節がやって来たということ。作者は、この作品をはじめ、この後、一年間で七作品が掲載

されており、「卒業歌」は卒業生を送るための歌であったということ。

第一四半期、児童は、焚火に、降る雪に、雪どけにと、身の回りの季節柄を作品に描いてみせた。

以上、昭和十七年第一四半期の「俳句」を検討してきた。

この時期に掲載された九八句のうち「戦時下」色を内容とするものは一一句であり、掲載率からは約一一・二%。前年十二月の戦果のはなばなしさが記憶に新しい中、「俳句」作品においては、そうした戦果が作句に与えた影響は色濃くはなかったということになろうか。

三　昭和十七年第二四半期における「俳句」

第二四半期（四月～六月）に掲載された「俳句」は一六二句。その内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、二一句であり、掲載作品に占める掲載率は約一二・九%となる。

12　戦勝を祈る社や花吹雪
（山梨県大石校高一男子、四月十二日・日、第一七二八号）

13　つみ草やモンペ姿の愛らしき
（宮城県気仙沼校高二女子、四月十五日・水、第一七三〇号）

14　春風に勝利の御旗ひるがへり
（北海道小頓別校六年女子、四月二十三日・木、第一七三七号）

15　麦ふみの父も軍歌を口ずさむ
（埼玉県栗橋校高二男子、四月二十六日・日、第一七四〇号）

16　靖國の杜にそそぐ春の雨
（東京市小石川区窪町校五年男子、四月二十九日・水、第一七四二号）

17　雨上り興亜日本の田植かな
（千葉県津富浦校高一男子、五月三日・日、第一七四六号）

18　若き葉の今朝も光れり天長節
（青森県女鹿沢校高二男子、同右）

19　青空に二羽のひばりの戦闘機
（山形県千歳校高二男子、五月八日・金、第一七五〇号）

20　出征の朝は晴れたり鳴くひばり
（同右）

21　青空に空中戦のごとつばめ飛ぶ
（山形県楯山校六年男子、五月十四日・木、第一七五五号）

22　飛行機とあげ雲雀あり日本晴
（山形県瀧山校六年男子、五月二十日・日、第一七六〇号）

23　慰問文書く手も進む春日和
（東京市本郷区汐見校六年女子、五月二十六日・火、第一七六五号）

24　編隊の銀翼遠し五月空
（埼玉県栗橋校高二男子、五月二十七日・水、第一七六六号）

25　高らかに軍歌の子らや風薫る
（宮城県仙台市五ッ橋校高一女子、六月二日・火、第一七七一号）

26　戦勝のまりつきにけり青葉かげ
（千葉県茂原校六年男子、六月三日・水、第一七七二号）

27　入団式朝日校舎に輝けり
（青森県女鹿沢校高二男子、六月四日・木、第一七七三号）

28　兄いづこ窓なる月を眺めけり
（千葉県竹岡校六年男子、六月五日・金、第一七七四号）

29　夏の夜や蚊にさされつつ慰問文
（茨城県武田第三校五年女子、六月十九日・金、第一七八六号）

30　聖戦へ六年の夏の花にほふ
（山形県米沢北校五年女子、同右）

31　細いけれどこの手で築くぞ大東亜
（千葉県御宿校高一男子、六月二十一日・日、第一七八八号）

32　草取の今日も話題は軍事便
（福島県好間第一校高二男子、六月二十六日・金、第一七九二号）

12　戦勝を祈る社や花吹雪

16　靖國の杜にそそぐ春の雨

12　「戦勝を」は、「皇軍」の勝利を祈り、出征兵士の武運長久を祈

願する郷の「社」は花の季節。掲載は四月中旬だが、作句した頃、山梨は桜吹雪だったということ。

16「靖國の」は、「靖國の社」に身寄りのものが祀られているということではなさそうだが、「春の雨」の中を靖國神社へ参拝したということか。

13　つみ草やモンペ姿の愛らしき
14　春風に勝利の御旗ひるがへり
15　麦ふみの父も軍歌を口ずさむ
17　雨上り興亜日本の田植かな
18　若き葉の今朝も光れり天長節
19　青空に二羽のひばりの戦闘機
20　出征の朝は晴れたり鳴くひばり
21　青空に空中戦のごとつばめ飛ぶ
22　飛行機とあげ雲雀あり日本晴
23　慰問文書く手も進む春日和

以上は、季語からは春の部。18の「若き葉」は夏の季語であろうが、「天長節」（昭和天皇の誕生日、四月二十九日）が春の季語。「天長節」は、この時代祝祭日とされた四方拝、紀元節、天長節、明治節の四大節の一つ。

13「つみ草や」では、少女がモンペ姿で若菜を摘んでいる光景。作者自身も「つみ草」をしているということか。

14で「勝利の御旗」が翻っているのは、校庭の国旗掲揚塔か。「春風に」は、戦勝の寿ぎもあろうが、北海道にも穏やかな春の日和が到来したということ。

15では、父が軍歌を口ずさみながら麦踏みをしているというもので、長閑さがある。この父は除隊したか、それとも入営免除の年齢であったか。高等科二年生の作者も共に麦踏みをしての作句であろう。

19、20、22の「ひばり」、21の「つばめ」の四句は、三人の山形県の児童による作品。

19と20は同じ作者。19の「青空に」は、出征見送りの朝、見上げた空に「二羽のひばり」が戦闘機のように素早く飛び交い、20の「ひばり」は、作者たちと一緒に出征見送りをしているということ。

21は、「つばめ」が、後方から追尾したり、急に半転したりと、戦闘機の空中戦のように飛翔しているというもの。戦闘機の空中戦をニュース映画で見たことがあるということであろうか。

22の「飛行機」は、この時代の空を飛んでいるのは、軍用機ということ。「日本晴」の中、「あげ雲雀」と共に、高い空を飛んで行く航空機を見上げている児童がいた。

23　慰問文書く手も進む春日和
29　夏の夜や蚊にさされつつ慰問文

23は、「春日和」の、穏やかな日差しを浴びての作成。29は「蚊にさされつつ」の「夏の夜」の作成だ。さて、その届け先は戦場か。病院の傷病兵か。何時の季節でも「慰問文」を書くのが児童の役割ということ。

24　編隊の銀翼遠し五月空
25　高らかに軍歌の子らや風薫る
26　戦勝のまりつきにけり青葉かげ
30　聖戦へ六年の夏の花にほふ
32　草取の今日も話題は軍事便

以上、季語からは夏の部。

24「五月空」は、五月雨の晴れ間の空か。戦闘機の編隊が、遠くの空を飛び、児童からは小さく見えたということか。

25では、「風薫る」なかで、子供等が軍歌を歌っているということ。

15「麦ふみの」では、父が軍歌を口ずさんでいた。どの「軍歌」か不明ながら、季節を、年齢をこえての「軍歌」の隆盛を物語っている

ということか。

26「戦勝のまり」は、「少國民新聞」第一七五〇号（昭和十七年五月八日・金）二面の記事、「戦勝のゴムまり」のこと。この記事の冒頭には、「南方の兵隊さんから、皆さんに下さつたゴムまりを、東京府では今八日の大詔奉戴日から、学校で配給します。」とあり、「東京府」でのことであるが、この配給は、全国各地の国民学校初等科の男女児童に配給されたもので、掲載日からの推測では、千葉県の児童も五月中には受け取っていたということか。

30「聖戦へ六年の夏の花」の意味を読み取るのは難しい。掲載された昭和十七年の夏（六月）が、「聖戦」から「六年」目の夏を迎えるとすると、その「聖戦」は、昭和十一年の夏のことになるが、その「聖戦」とは何を指すのであろうか。作者の児童は五年生であり、自分たちの「夏の花」が匂うということではない。とすれば、校庭の六年生の花壇で夏の花が匂っているとでも推測するほかはなさそうである。

32「草取」は、田の草取り。「今日も」とあることから、この作業は幾日目かとなる。高等科二年生の児童による勤労奉仕ということか。

27　入団式朝日校舎に輝けり

「入団式」は、何への「入団」か不明であるが、「少國民新聞」には、各地の「少年団」の記事があり、作品と同じ青森県では、「三本木校」の「子供防火団」（四月十九日・日、第一七三四号）の記事が掲載されていた。作者の在籍校「青森県女鹿沢校」でも同様の少年団があり、四月の新入生を迎えての「入団式」であったか。

28　兄いづこ窓なる月を眺めけり

31　細いけれどこの手で築くぞ大東亜

28は、季語から、月は秋だが、掲載日から、この月は五月か。「兄いづこ」は、兄はどこでこの月を眺めているだろうかの作意であり、時代背景からは、兄は出征中であり、その地が知らされていないということであろう。

31には季語がなく、高等科一年生男子児童の決意を内容とするもの。この時期ゆえの作品ということ。

以上、第二四半期においては、作者である児童の肉親が戦地にいる内容の作品は、28「兄いづこ」を唯一とし、その他は、児童による、神社への参拝、春の野や田植での勤労奉仕、出征の見送り、慰問文作成と、「銃後奉公」が児童の「戦時下」であったということであった。

一方、第二四半期の「俳句」は、一六二句であり、「戦時下」色を内容とする作品が二一句。残りの一四一句は、児童の身の回りの日常を内容とする作品であった。

れんげ田にねれば青空雲もなし

（神奈川県小田原市大窪校五年男子、四月三日・金、第一七二一号）

草青む丘に寝転び友を待つ

（北海道函館市的場校高一男子、四月七日・火、第一七二三号）

「れんげ田に」は、湘南の早春。蓮華が咲いている田圃で、仰向いて青空を見上げている。

「草青む」は、北海道でも、函館では草が萌え、寝転んで友を待つことのできる温かさというもの。

作句の時期は不明であるが、掲載時から三月下旬と推測され、それぞれの住まいの季節の移りを身体で捉えている。

春の暮山吹さかりと咲にけり

（神奈川県横浜市豊岡校六年男子、四月二十八日・火、第一七四一号）

春の夜や菜の花ぬらすおぼろ月

（青森県田子校高二男子、同右）

春風のおともしてゆくさくら花

（福島県掛田校高二男子、四月二十九日・水、第一七四二号）

おぼろ夜や長くしろじろ藤の花

（山形県梨郷校高二男子、五月一日・金、第一七四四号）

菜の花をつぎつぎたづぬる白い蝶

（新潟県芹川校高一男子、五月十日・日、第一七五二号）

「山吹」「菜の花」「さくら」「藤」。それぞれの土地で、それぞれの花が咲いている下で、児童は生活していた。

横浜では「山吹」が盛りを迎え、青森では「菜の花」が「おぼろ月」に浮かんで見えたということ。

「春風のおともしてゆく」は、盛りが過ぎた桜の花びらが、春風に乗って、歩いていく人に散りかかっていく様子。

「おぼろ夜」、「藤の花」、「菜の花」も、季語では春だが、青森では菜の花が、山形では藤の花が咲き、新潟では黄色い菜の花畑に白い蝶が飛び交っている光景が詠み込まれた。作者は、季節を、それぞれの花で、色彩で、動きで捉えて見せたということだ。

春の朝桃咲く里にひばり鳴く

（埼玉県中川校高一男子、四月十五日・水、第一七三〇号）

青空にひばりうれしく鳴いてゐる

（栃木県山辺校高二男子、四月二十三日・木、第一七三七号）

遠山は霞みて雲雀雲の上

（岩手県煙山校高二男子、五月二十二日・金、第一七六二号）

春日和雲雀が上る空きよし

（北海道古多糠校高一男子、五月二十四日・日、第一七六四号）

朝空にのども裂けよとあげ雲雀

（北海道幾寅校高一男子、五月二十七日・水、第一七六六号）

ひばりは、春を代表する小鳥。戦時下の内容をもつ19、20、22にも詠み込まれ、児童の住んでいる各地で、その土地の季節を聞き取っていた。

星近く蛍の光飛んで消ぬ

（埼玉県川口市第一校五年男子、六月十九日・金、第一七八六号）

病床の弟に見せてやる蛍籠

（埼玉県川口市第一校五年男子、六月二十三日・火、第一七八九号）

作者は、別の児童。同じ在籍校学年であり、クラスメイトでもあろうか。友達仲間での「蛍狩り」であったか。「病床の」は、その蛍を病床の弟の見舞いとしたということか。

以上、昭和十七年第二四半期の「俳句」を検討してきた。

第二四半期、掲載された一六二句のうち二一句が「戦時下」色を内容とするものであり、掲載率からは約一二・九％となり、第一四半期の約一一・二％を超えるものの、作者である児童の身の回りの、季節の風景を内容とする作品が多い様子が現れていた。

四　昭和十七年第三四半期における「俳句」

第三四半期（七月～九月）に掲載された「俳句」は一三七句。この内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、次の九句であり、掲載作品に占める掲載率は約六・六％となる。

33　つばめ来ぬ勝ちどきあがる南より

（青森県第二大成校六年男子、七月三日・金、第一七九八号）

34　増産の努力にしぼる玉のあせ

（山梨県甲府市春日校五年男子、七月五日・日、第一八〇〇号）

35　けふもまた翼の神に手を合はせ

（秋田県岩崎校高二女子、七月二十四日・金、第一八一六号）

36　戦況のニュースに傾く耳はやし

（宮城県仙台市西多賀城校五年男子、八月十二日・水、第一八三二号）

37　夏の宵ニュース聞きゐる群に立つ

（北海道札幌市桑園校六年男子、八月十九日・水、第一八三八号）

38　奉仕して遙かに仰ぐ日の出かな

（秋田県長野校高二男子、同右）

39　編隊機飛びゆくけさの日和かな

（東京市大森区入新井第二校四年男子、九月二十二日・火、第一八六七号）

40　日曜日友をさそひて宮さうぢ

（千葉県＊南校六年男子、九月二十七日・日、第一八七一号）

41　訪問機爆音高し秋の空　（神奈川県平塚市第一校五年男子、同右）

33　つばめ来ぬ勝ちどきあがる南より

36　戦況のニュースに傾く耳はやし

37　夏の宵ニュース聞きゐる群に立つ

33「つばめ」の季語は春であり、春、つばめのやって来る南の国に日本軍の「勝ちどき」があがるということ。掲載日から推測すると、この年（昭和十七年）六月のミッドウェー海戦での戦果に対しての「勝ちどき」であったか。六月五日の海戦を、十日、大本営は、その戦果をアメリカの空母二隻撃沈、日本側空母喪失・大破各一隻と発表していたが、実際の損害を過少に発表し、戦果を誇っていた。

36「戦況の」は宮城県仙台市で、37「夏の宵」は北海道札幌市で、人々が、戦果を報じるラジオニュースに聞き入ったということだ。

34　増産の努力にしぼる玉のあせ

38　奉仕して遙かに仰ぐ日の出かな

40　日曜日友をさそひて宮さうぢ

34「増産の」は、食糧増産に駆り出された児童の勤労奉仕。

38「奉仕して」は、勤労奉仕を終えて日の出を仰ぐという内容で、早朝、夜明け前からの「奉仕」ということ。

40「日曜日」の在籍校名は、一字が判読不明。日曜日に、友達仲間と、日頃参拝しているお宮の清掃奉仕。お宮の掃除も児童に課された奉公ということだ。

35　けふもまた翼の神に手を合はせ

35の「翼の神」とは、「空の軍神」のことであろうか。「少國民新聞」第一八一五号（昭和十七年七月二十三日・木）は、第一面の全面を使って〝一億の誇り「空の軍神」〟を掲載し、同年五月二十二日に戦死した戦闘機「隼隊」の隊長・加藤建夫中佐が二階級特進し、陸軍少将に任ぜられたことを報じた。いわゆる「空の軍神」であるが、35の掲載が発表の翌日、七月二十四日であることから、作品での「翼の神」を「空の軍神」とすることには無理があるか。「けふもまた」からは、「翼の神」への礼拝はこれまでも日常的に行われていたことが推測できるところであり、「翼の神」とは、戦闘機を護る神のことであり、上空を飛ぶ戦闘機に手を合わすことと考えておきたい。

39　編隊機飛びゆくけさの日和かな

41　訪問機爆音高し秋の空

39「編隊機」は、穏やかな日和の大空を、編隊を組んで戦闘機が飛行していく様子を眺めていたというもの。

41「訪問機」は、飛行兵の出身地へ、自らが操縦して飛行するもの。飛行の予定は、予め出身の国民学校に知らされていたということか。

以上、第三四半期における「戦時下」を内容とする「俳句」について検討してきたが、その内容は、戦果のニュースに聞き入り、食糧増産に、神社の清掃に勤労奉仕をするなど、銃後の役割を果たすものであった。

一方、第三四半期の「俳句」は、一三七句が掲載され、そのうち「戦時下」色を内容とする作品が九句。残りの一二八句は、児童の身の回りの日常を内容とする作品であった。

野天風呂頭の上で蝉の声

（千葉県旭校高二男子、七月十五日・水、第一八〇八号）

つゆはれて蝉声近き山辺かな

（栃木県熱田中央校高二女子、七月二十三日・木、第一八一五号）

にはか雨はるか向かふにせみの声
（茨城県磯原精華校三年男子、七月二十四日・金、第一八一六号）
山路をよぎる流れに夏の蝉
（青森県田子校高二男子、七月二十六日・日、第一八一八号）
ひぐらしが止んで静かに日が沈む
（茨城県世喜第一校高一男子、八月九日・金、第一八三〇号）
午後の二時せみはたとやむ暑さかな
（埼玉県小手指校高一男子、八月十九日・水、第一八三八号）
内水のしづく輝き蝉しぐれ　（東京市浅草区精華校六年男子、同右）
蝉しぐれ鎮守の森や青葉風
（秋田県音内校五年女子、八月二十三日・日、第一八四二号）
ゆるやかにつくつく法師鳴き出だす
（福島県宮校五年男子、八月三十日・日、第一八四八号）
秋近くまばらになりし蝉の声
（東京市大森区入新井第二校四年男子、九月四日・金、第一八五二号）
せみ鳴くや森は坊やの遊び場所
（静岡県雄踏校高二男子、九月十日・木、第一八五七号）

「つゆはれて」は、梅雨が明け、蝉の声も夏本番を告げているというもので、いよいよ暑苦しい蝉の声だ。

「午後の二時」は、夏で一番暑い時。暑すぎて、蝉も鳴き止んでいるということか。

「蝉」は夏の季語だが、「ひぐらし」は、秋の季語。七月頃の夏から鳴き出し、九月十月頃の秋、夜明けや日暮れに鳴き、「かなかな」ともよばれる蝉。「ひぐらし」が鳴きはじめるのは、夕方間近い日暮れ頃。そのひぐらしが鳴き止むのは、夏の長い日が暮れる頃だ。この句は、蝉の声のすだく日中から、かなかなと日暮れを告げる「ひぐらし」が止み、長い夏の一日が暮れて行くさまを詠んだもの。

「ゆるやかに」の「つくつく法師」は、秋の季語。七月末から九月末ころまでの昼間に鳴く、秋の蝉。福島に秋の季節が来たことを実感したということ。

「秋近く」は、何処にいても聞こえていた蝉の声が、ふと気が付くと「まばらに」なっていた。今年の夏も終わり、秋が近づいて来たということ。掲載日から推測すれば、作句は、八月末か。東京では殘暑の厳しい時期であろうが、季節が移りつつあることを詠んだもの。

こほろぎの鳴く静けさや秋近し
（東京市神田区小川校六年男子、九月一日・火、第一八四九号）

蝉の鳴き声が「まばらに」なれば、「こほろぎ」が聞えて「秋近し」を思わせるということ。これも掲載日から推測すれば、作句は、八月下旬でのことか。東京では、殘暑の季節だが、蝉から「こほろぎ」へ、夏から秋への移り行きを児童は聴覚的に捉えていた。

天よりも高くつまれよ稲の山
（青森県牛深校高一男子、九月二十四日・木、第一八六九号）

稲刈りで逃げどころなきいなごかな（千葉県菊間校高二女子、同右）

季節は秋。青森でも千葉でも稲刈りだ。稲刈りの時期は、それぞれの地域での天候や作柄によって異なり、作句の時期も同様であろうが、同じ紙面での掲載であり、東日本では稲刈りの時期がやってきたこと、男児も女児も田圃での働き手、ということが編集子の意図であったか。

昭和十七年第三四半期、「戦時下」を内容としない「俳句」作品には、季節と共に過ごし、その季節を、移り行きを、耳で、目で、実感し、作句して見せた児童がいたということであった。

五　昭和十七年第四四半期における「俳句」

第四四半期（十月～十二月）に掲載された「俳句」は七三句。この内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、次の一六句であり、掲載作品に占める掲載率は約二一・九%となる。掲載数が、この年の四半期のうちで一番少ない一方、「戦時下」を内容とする作品の掲載率が多かったということになる。

42　戦勝の国静かなり秋の宵
（北海道札幌市桑園校六年男子、十月一日・木、第一八七四号）
43　英霊の還ります日や稲匂ふ
（秋田県清水校高二男子、十月四日・日、第一八七七号）
44　日の丸に書く手勇まし「大和魂」
（北海道札幌市桑園校六年男子、十月十八日・日、第一八八九号）
45　稲を刈るそばへ郵便戦地から
（千葉県大貫校高一男子、同右）
46　秋風にひびく拍手南まで
（千葉県竹岡校六年男子、十一月四日・水、第一九〇三号）
47　青空にそびえて尊し忠霊塔
（東京市荒川区第四瑞光校六年男子、十一月十五日・日、第一九一三号）
48　明治節菊もよく咲き日本晴
（東京市杉並区桃井第二校三年女子、同右）
49　稲刈りや勤労奉仕の旗立てて
（秋田県清水校五年男子、同右）
50　秋晴れや召さる人あり日章旗
（岩手県安渡校高一女子、十一月二十二日・日、第一九一九号）
51　村の中日の丸一ぱい奉戴日
（秋田県里見校六年男子、十二月二日・水、第一九二七号）
52　お月見に真心こもるゐもんぶん
（山形県狩川校四年女子、十二月六日・日、第一九三一号）
53　いくさがみしづまりまして一周年
（千葉県竹岡校六年男子、十二月十一日・金、第一九三五号）
54　勝ち抜けと我をはげます日の出かな
（同右）
55　明けの月あびて霜ふむ宮掃除
（千葉県更科校三年男子、同右）
56　皇軍の戦果にこたへ薪切り
（岩手県田頭校高二男子、同右）
57　地図かきて赤く染むるや占領地
（栃木県市橋校高一男子、同右）

53から57までの五作品は、十二月十一日の「私達の作品室」に掲載された。

「少國民新聞」では、「大東亜戦争一周年記念の作品」として、十二月八日と九日に、「私達は誓ふ」の欄を設定し、綴方、詩、短歌、書方、図画を掲載したが、俳句は掲載されず、十一日の「私達の作品室」の欄に綴方、書方と共に俳句作品が掲載された。つまり、十一日の「私達の作品室」は、「大東亜戦争一周年記念の作品」を掲載した、「私達は誓ふ」の欄の補遺としての設定と推測できるものであり、ここに掲載された俳句作品も「大東亜戦争一周年記念の作品」であったと考えられよう。

42　戦勝の国静かなり秋の宵
56　皇軍の戦果にこたへ薪切り
57　地図かきて赤く染むるや占領地

42「戦勝の」は、掲載日からは、十月一日以前の「戦勝」となるが、具体的にどのことを意図しているかは不詳。

第二四半期の作品、33「つばめ来ぬ勝ちどきあがる南より」での「勝ちどき」を、この年（昭和十七年）六月のミッドウェー海戦での戦果に対しての「勝ちどき」と推測しておいたが、それ以後、「秋の宵」での「戦勝」が「少國民新聞」の第一面で報じられた記事は見いだせない。

56「皇軍の」における「戦果」は、前述したように、「大東亜戦争一周年記念の作品」であり、「戦果」は、大東亜戦争の一年間と考えられる。

57「地図かきて」も「大東亜戦争一周年記念の作品」と考えられ、一年間の「戦勝」の結果である「戦果」としての「占領地」を、地図上で赤く塗ったところ、赤の範囲が広く見えるということ。

43　英霊の還ります日や稲匂ふ
47　青空にそびえて尊し忠霊塔
49　稲刈りや勤労奉仕の旗立てて

53　いくさがみしづまりまして一周年

43「英霊の」は、戦死した兵隊の遺骨迎えの日の事。「稲匂ふ」は、そこかしこで稲刈りが行われ、刈り干しされた稲の匂いが辺りに満ちているということか。

47「青空に」の「忠霊塔」は、戦死した「英霊」を祀る処。43の「英霊」も帰還した地の忠霊塔に祀られることになる。

49「稲刈りや」は、勤労奉仕で稲刈りをしているということ。「旗立てて」は、それぞれの少年団の「旗」か。43の「稲匂ふ」の稲刈りは高等科二年の男子、49の「稲刈り」は、五年生の男子。学年は違うものの、同じ秋田県清水校に在籍しており、英霊の遺骨迎も、勤労奉仕の稲刈りも、一緒の体験であったということか。

53「いくさがみ」は、「軍神」のこと。この作品も「大東亜戦争一周年記念の作品」の一つ。「大東亜戦争」開戦の真珠湾攻撃の一員として特殊潜航艇で参加し戦死した九人が、翌年の昭和十七年三月に「九柱の軍神」と崇められたが、その戦死から一周年ということ。

44　日の丸に書く手勇まし「大和魂」
50　秋晴れや召さる人あり日章旗
45　稲を刈るそばへ郵便戦地から
46　秋風にひびく拍手南まで
52　お月見に真心こもるゐもんぶん
55　明けの月あびて霜ふむ宮掃除

この六作品には、いずれも召集され出征している兵士に係わる内容がある。

44「日の丸に」は、召集され、入営する兵士への餞別の「日の丸」に、「大和魂」と寄せ書きしたというもの。

50「秋晴れや」は、入営する人の家をはじめ、近所一帯に「日章旗」が掲げられている光景を詠んだ作品。

札幌(44)に、岩手(50)にと、召集され、入営していく人々が、いたということであり、出征の見送りに駆り出された児童たちがいたということ。

45「稲を刈る」は、戦地に出征している身内の兵士からの便りが届いたということであろう。稲刈りをしている田圃まで届けられたということであり、配達夫も、戦地からの郵便を心待ちにしている出征家族の心持を理解しているということ。

46「秋風に」は、出征兵士の武運長久を願っての神社への参拝。肉親縁者が「南」の戦場にいるということか。

52「お月見に」では、作者は、真心こめて「ゐもんぶん」を書いているといこと。「お月見」は、秋の季語で、陰暦八月十五夜の月を見ることであり、太陽暦では、九月のことであるが、掲載日（十二月六日）から推測すると十月の十三夜、或いは十一月の満月が、この「お月見」であったか。入営し、戦地へ出征している兵士への慰問文の作成は、児童の役割であった。

55「明けの月」の「宮掃除」も、児童の役割。児童は、兵士の武運長久、皇軍の勝利を鎮守の神様に毎朝祈願するが、休みの日には、そのお宮の清掃をするということ。ただ、この作品では、「明けの月」の頃、すなわち、明け方の空にまだ月が残っている時刻であり、「霜」が降りている季節、その「霜」が溶けずに残っている寒さの中での「宮掃除」ということである。

48　明治節菊もよく咲き日本晴
51　村の中日の丸一ぱい奉戴日
54　勝ち抜けと我をはげます日の出かな

48「明治節」は、明治天皇の誕生日（十一月三日）。第二四半期の18「天長節」と共に、この時代、祝祭日とされた四大節の一つ。

51「村の中」の「奉戴日」は、掲載日から推測すれば、十一月八日の「大詔奉戴日」のことか。

昭和十七年一月四日の「少國民新聞」（第一六四五号）は、第二面

で、「宣戦の大詔を下したもうた八日」を「大詔奉戴日」と決定し、それまでの「興亜奉公日」は廃止されることを報じ、早速、一月の八日から始められ、大政翼賛会が中心となって、「大東亜戦争が終るまで」続けられることになったと解説した。「大詔奉戴日」には、詔書奉読、必勝祈願、国旗掲揚、職場奉公などが実施項目とされ、村中での日の丸の掲揚となっていたということ。

54「勝ち抜けと」の作者と53「いくさがみ」の作者は、在籍校学年は同じだが、別人。「日の出」に向かって皇軍の戦勝と兵士の武運長久を祈るものだが、祈る児童自身にも「勝ち抜け」と「日の出」が励ましてくれているという内容。

第四四半期、「戦時下」を内容とする「俳句」作品は、十二月に、「大東亜戦争一周年記念の作品」として掲載されたが、それ以前の時期にあっても、「皇軍の戦果」が詠われた。一方、「戦果」の当事者である兵士の入営、出征、英霊での帰還に児童は立ち会い、無事を祈っての宮参りに、その宮の霜を踏んでの清掃に、出征兵士宅での勤労奉仕にと働き、それらを内容とする作品を詠んだということであった。

第四四半期の「俳句」は、七三作品であり、「戦時下」色を内容とする作品が一六作品。残りの五七作品が、児童の身の回りの日常を内容とする作品であった。

かあちやんとくりをたべたべ月見かな
（神奈川県田名校二年女子、十月四日・日、第一八七七号）

猫の子が火のそばに来る秋の朝
（秋田県睦合校高二男子、十月二十三日・金、第一八九三号）

豊年の太鼓の音もよろこびて
（青森県田子校高二男子、十一月八日・日、第一九〇七号）

木枯しに池を埋めし落葉かな
（山形県梨郷校高二男子、十一月十八日・水、第一九一五号）

にほつみやだんだん高く屋根までも
（秋田県三輪校四年男子、十二月二日・水、第一九二七号）

麦を踏む足も揃つた日曜日
（群馬県清里校高一男子、十二月二十七日・日、第一九四九号）

「かあちやんと」は、「くり」が秋の季語。「月見」は、第四四半期52「お月見に」同様、陰暦八月十五夜の「月見」であり、「月見」には、芒を飾り、芋や枝豆と共に栗をお供えした。作者が食べた栗は、そのご相伴ということか。

「猫の子が」は、子猫が、朝、竈の火のそばで丸くなっているということで、十月下旬の秋田には、秋が深まって来たことを寒がりの子猫が教えたということ。

「豊年」は秋の季語。稲刈りも終へ、豊年の秋、祭囃子も嬉しそうに響いて来るというもの。

「木枯し」は冬の季語。山形の十一月は、冬を迎え、落葉が池の面を埋め尽くしているということ。

「にほ」は、秋の季語。稲の脱穀が終った藁を円筒形に積上げて、乾燥させて保存しておくもの。その積み重ねが、屋根まで届きそうに高くなっていくということ。積み手には作者もいたということか。

「麦を踏む」の季語は春だが、農作業としての麦踏みは、冬。「上州の空っ風」の日曜日、一家総出での麦踏みということだ。

以上の六作品では、秋から冬へと季節が移ってきた。

第四四半期、「戦時下」を内容としない作品においては、他の四半期と同様、児童は、移りゆく季節と共に歩んでいたということである。

六　昭和十七年「俳句」作品の概括

昭和十七年に掲載された「俳句」四七〇作品のうち、作品内容に「戦時下」色の見えるのは五七作品（約一二・一％）。

内訳は、第一四半期では　九八作品中一一（約一一・二％）。

第二四半期では一六二作品中二一（約一二・九％）。
第三四半期では一三七作品中　九（約　六・六％）。
第四四半期では　七三作品中一六（約二一・九％）。

第一四半期における「戦時下」の内容は、作者の父が出征中の当事者であるのは一作品のみであり、他は、「開拓士」や「勇士」の見送りの列に整列したり、戦勝祈願、武運長久の神社参拝、傷病兵への慰問を内容とするものであり、児童に課せられた役割がその内容であった。

一方、第一四半期における最大の戦果はシンガポールの陥落であったが、「俳句」作品に読み込まれることはなかった。

第二四半期においては、作者である児童の肉親が戦地にいる内容の作品は、兄が出征中と推測される一作品のみであり、その他は、第一四半期と同様に、児童による、神社への参拝、春の野や田植での勤労奉仕、出征の見送り、慰問文作成と、「銃後奉公」が児童の「戦時下」であったということであった。

第三四半期では「戦時下」を内容とする作品において、作者の児童にかかわりのある肉親親族が兵隊である内容は見られず、児童は、戦果のニュースに聞き入り、食糧増産に、神社の清掃に勤労奉仕をするなど、「銃後」の役割を果たすものであった。

第四四半期では第三四半期と同様、児童の肉親親族に係わる内容の作品は見られなかった。十二月は、真珠湾攻撃から一周年ということもあり、「大東亜戦争一周年記念の作品」が掲載されたが、それ以外の時期にも「皇軍の戦果」が詠まれた。児童は、入営、出征、英霊での帰還に立ち会い、無事を祈っての宮参りに、その宮の霜を踏んでの清掃に、勤労奉仕にと働き、それらを内容とする作品を詠んだ。

以上、昭和十七年の「俳句」を検討してきたが、この年の「短歌」では、「戦時下」色を内容とする作品が、全作品掲載の約四三・八％を占めており、児童の日常に「戦時」が一層、色濃くなったことが推測できたことに比べて見ると、「俳句」では、その掲載率は約一二・一％であり、その内容も当事者である児童の肉親親族が出征中であることを内容とする作品は、僅かに二作品に止まり、それ以外は、「戦時下」ゆえに児童に課せられた役割が内容であった。

その内容は、入営、出征の見送りと英霊迎え、「武運長久」を祈る宮参りとそのお宮の清掃、季節ごとの勤労奉仕などであり、大人が出征していく中、児童は、働き手として期待され、実際の働き手であったということを表す作品ということであった。

一方、「戦時下」を内容としない作品四一三句については、それぞれの四半期において、それぞれの季節の中で、それぞれの季節と共に過ごし、その季節の移り行きを、耳で、目で、肌で実感し、作句して見せたということであった。

（二〇一七・一一・二六）